

ジッドのジャン・カバネル宛未刊書簡をめぐって

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院教授

<https://doi.org/10.15017/16862>

出版情報 : Stella. 28, pp.179-184, 2009-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



ジッドのジャン・カバネル宛未刊書簡をめぐって

吉井亮雄

後世の評価が定まり、文学史に特筆大書される存在となった作家といえども、存命中は同時代の評価にたいし決して超然としていたわけではない。たとえば、今や世界文学の最高峰と目され、その栄光たるやいや増すばかりのプルーストが、新聞・雑誌の小さな記事にまで注意深く目を通し、自分に向けられた賛辞や批判に応えて、病身を横たえる居室から驚くほど小まめに感謝や弁明の書簡を送ったことは周知である。ジッドの場合も事情は変わらない。新作発表時（それはしばしばスキャンダル到来の時でもあった）を中心に、情報収集サービス業者「アルゴス」に依頼し、自身にかんする新聞・雑誌の切り抜きを長年にわたり収集していたのである。その結果として総数およそ3,500点の記事や書評が26冊の分厚いファイルに整理・分類され、現在はパリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫に保管されている（執筆者から直接贈られたものも含む）。同時代の反応・受容を伝えるにとどまらず、ほぼ確実に作家自身が読んだという意味でも貴重な資料である¹⁾。

ジッドが自作への評価をめぐり文学関係者に宛てた書簡はすでに大半が公刊されているが、小論では最近現存の確認された一通（個人蔵）を紹介し、あわせて若干の関連情報を提供したい。まずは書簡の全文を訳出しよう――

[パリ], 1938年4月10日

拝略

大いに力づけていただき有り難く存じます。私の著作にかんするご論考は、私の口から秀逸だなどとは申しあげにくくなるほど、お褒めの言葉に満ちています。煽てられすぎな気もしますが、決して私の思想を歪めてはいないこの鏡に身を傾けるのは心地よいことです。わけてもあなたは、作家にとって最も重要な、思想の「かたち」というものに敏感であられるように思える。作品からの引用は実に正しく選ばれているので、論考を拝読することで、さまざまな揺れをこえて、私の「定数」と呼ぶうるものがいっそうよく感じとれます。思想の確かさを追究するだけですでに有益な模範・

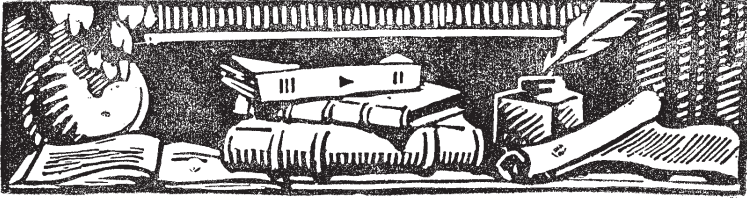
教えたりうるとお説きいただき、自らもまさに然りと認識する、何よりもそこに私は大きな励ましを見出し、心からの感謝を申しあげる次第です。敬具。

アンドレ・ジッド

書状自体に受け手の名はないが、封筒の宛先は「パリ9区シャプタル通り21番地、『トリプティック』誌編集部気付、ジャン・カバネル様」。ジッドの言及するのが同誌の1938年1月号と2月号に連載されたカバネルの論文「アンドレ・ジッド」であることは疑いを容れない²⁾。なお、書状冒頭に論文送付への明確な礼の言葉がないこと、また雑誌刊出からこの礼状までに少々時日が経過していることから見て、ジッドは論文の存在を著者本人や掲載誌からの献本ではなく、別のルートによって知ったのではあるまいか。

著者ジャン・カバネル(1888-1957年)は、本名をジャン・テクシエといい、主に社会主義の活動家・ジャーナリストとして知られるが、文芸評論家、画家・ポルトレティストでもあった。「カバネル」は文芸評論家としてのペンネームである。活動家・ジャーナリストとしての彼の経歴を要約すると、まずは『デベッシュ・ド・ルーアン』紙を創立した共和主義者の父の影響を受け、20代半ばにフランス労働党に加入。第1次大戦従軍時は、いくつかの新聞に特派記事を送った。1936年に社会党の前身SFIOに加入。第2次大戦が始まると速やかにレジスタンスに参加し、『被占領者への助言』(1940年)など4冊の対独抵抗文書を立て続けに出版している。フランス解放時に臨時諮問会議議員に就任、戦後は社会党系の日刊紙『ノール・マタン』や、同党の機関紙『ポピュレール・ディマンシュ』などの時評家として健筆をふるった。いっぽう文芸評論家としての活動は特に両次大戦間が盛んで、まさに『トリプティック』が主な執筆媒体であった。なお筆者が承知するかぎり、この方面でのまとまった著書はない。

『トリプティック』は各号32ページ立ての月刊誌(夏季の6-9月は隔月刊で、年間10回の発行)。読者層を「医師団に限定した」一種の業界教養誌である。1926年10月に創刊され、39年後半期中断を挟み、翌40年まで発行を続けた。標題が示すように3部構成をとり、副題に「文学・芸術・科学」を添える。ただし「科学」は実際にはもっぱら医学関係の内容に限られており(同誌に掲載された広告もまた然り)、これを映して目次では代わりに「医学」の項目が立てられている。



LETTRES



André GIDE

De tous les écrivains de notre époque, André Gide est assurément le plus important. Son importance ne date d'ailleurs pas d'aujourd'hui, mais cet écrivain, dont le premier ouvrage parut en 1892, qui donc en parlait dans ces temps d'avant guerre ? Il avait cependant publié avant juillet 1914 la plupart des œuvres qui sont aujourd'hui l'objet de tant de gloses et de discussions ; entre autres *le Voyage d'Urien*, *Paludes*, *les Nourritures terrestres*, *Philoctète*, *le Prométhée mal enchaîné*, *le Roi*

同誌のなかで最大の分量を占める「文学」の項は毎号、存命中の作家ひとりを対象としたカバネルの評論と、当該作家の小説や詩の抜粋が中心をなす。評論を飾る作家の肖像デッサンはカバネル自身の手による。扱われた作家は、創刊号のジョルジュ・デュアメルを皮切りに、コレット、クロード、ヴァレリー、ジロドゥー、ジョゼフ・ケッセル、ルナール、コクトー、レオトー、ウージェーヌ・ダビ、モーリアック、ジオノ、セリーヌ、ジュアンドー、マルロー、ジャック・ド・ラクルテル、モンテルラン、ジュリアン・グリーン、バルナノス、マルタン・デュ・ガール、サルトル、サン＝テグジュペリ等々と、当然のことながら号数を重ねるごとに多岐にわたってゆく。これに続く「医学」の項は、医師・医学部教授を自宅を訪ねての「一時間」（時として最近物故した医学関係者の追悼記がこれに代わる）。この項は一貫してルー博士なる人物が執筆している。また最後におかれた「芸術」の項は、稀に代役の立つことはあるが（そのひとりにはジャン・テグジエ）、ほぼ常に画家・彫刻家のアンドレ・ポーランが担当し、各号ひとりの芸術家にかんする論考を別丁図版を付して掲載している。対象となった芸術家のなかから特に著名なところを拾えば、ユトリロ、ヴラマンク、ピサロ、マチス、マイヨール、フジタ（藤田嗣治）、ローランサン、ボナール、モーリス・ドニ、エミール＝アントワヌ・ブールデルら。後期にはマルセル・デュシャンも論じられている。

さて、2号にまたがり掲載されたカバネルのジッド論は計19ページとかなり分量のあるもので、前半部は「あらゆる現代作家のうち明らかに最も重要」な作家ジッドの多面性を論じ、続く後半部は処女作『アンドレ・ワルテルの手記』から大作『贗金つかい』あたりまでの創作活動を年代順に跡づける。今日の研究水準に照らせば、とりたてて鋭い指摘・分析があるわけではないが（したがって小論ではその具体的な内容紹介は省く）、少なくとも、抑制の効いた筆致でジッドの思想や作品をバランスよく概観・整理した好論と評することはできる。とりわけ、『ソヴィエト旅行記』『同・修正』が巻き起こした激しい賛否両論の余波がまだ治まらぬこの時期に、社会主義者としての自らの政治的主張を文学評論に持ち込まない姿勢は、受容史の観点からも注目し値しよう。1938年の時点でジッドの共産主義への傾倒とその後の離反を判断材料から外すというのはむしろ例外的な姿勢であって、ジッドはそこにこそ「さまざまな揺れをこえて」抽出された自らの（^{コンスタント}定数）を認め、論者の功を称えたのだと思われる。

カバネルがジッドを論じた2号には、『トリプティック』文学欄の慣例にしたがい、ジッド作品の抜粋が添えられた。第115号には『贗金つかい』から、ふたりの登場人物が対話する第2章4節の全文が「ベルナルとローラ」の題で再録されている。だが注目すべきは、これに先立つ第114号に掲載されたテキストであろう。ジッドが1907年に発表した『放蕩息子の帰宅』が8ポ小活字で生まれ、雑誌全体の3分の1に当たる11ページを占めているのである³⁾。この事実は、ジャック・コトナン作成のジッド著作目録をはじめ、従来のどの書誌においても指摘されたことがない。ただし厳密に言うならば、掲載テキストは『放蕩息子の帰宅』の「完全版」ではない。カバネルは、作品冒頭に置かれた数行を作者ジッドによる序文と見なし、再録から除外しているからである。同じ1930年代にドイツで出版された語学教科書版も類似の誤りをおかしたが、この冒頭の一節は明らかにテキスト内の話者による語りであり、またそう取らなければ作品の意図された重層的構造を見失うことになる⁴⁾。解釈の本質にかかわる小さからぬミスだが、もちろんジッド自身はこれにはまったく関与していない。

ジッドとカバネル=テクシエの関係は、^{ほそぼそ}細々とではあるがこれ以降も続いた。筆者は未見だが、ドーセ文庫には1945年12月15日と1950年6月11日のジッド宛書簡2通が収められている。また同文庫のジッド旧蔵ファイルには、「ジャン・テクシエより敬意を込めて」と自筆で記された『ポピュレール・ディマンシュ』1950年6月25日号掲載の時評の切り抜きも保存されている（ジッドの新著『行動の文学』に言及したこの時評では、『トリプティック』の場合とは異なり、社会主義者としての主張がかなり明確に述べられる⁵⁾。同年10月10日付のテクシエ宛未刊書簡でジッドは時評数点の送付にたいし礼を述べているので、この切り抜きもそのときに贈られたうちのひとつかも知れない⁶⁾。

だがおそらくはこの書簡が両者のやりとりの最後となった。4か月後の51年2月19日、ジッドは81歳でこの世を去る。半月後、テクシエは『ポピュレール・ディマンシュ』の丸々1面を費やして大作家を悼悼した⁷⁾。彼がこの時評を「アンドレ・ジッドとその^{コンスタント}〈定数〉」と題したのは、まず間違いなく13年前の礼状で作家自身が使っていた表現を念頭においてのことである。またその折の記憶を確認するように、紙面の中央を飾ったのも、かつて『トリプティック』のジッド論冒頭におかれたのと同じの肖像デッサンであった。

註

- 1) これらの切り抜きのは大半は現在、英国シェフィールド大学のインターネットサイト「ジディアナ」で簡便に検索・参照することができる。
- 2) Jean CABANEL, « André Gide », *Triptyque*, n° 114, janvier 1938, pp. 3-10, et n° 115, février 1938, pp. 3-13. ただしこの論文はジッド旧蔵の切り抜き保存ファイルのなかには収められていない。
- 3) André GIDE, *Le Retour de l'Enfant prodigue*, in *Triptyque*, n° 114, pp. 15-25.
- 4) Voir André GIDE, *Le Retour de l'Enfant prodigue*, Leipzig: Verlag von Quelle & Meyer, s. d. [1932], coll. « Bibliothèque Française » n° 28, 40 pp. この語学教科書版は削除ではなく、逆に過剰な付加によるミスをおかした。すなわち、作品冒頭の一節を作者ジッドの序文と見なしたうえで、それに続けて刊行者による短い解題を挿入することでテキストを分断してしまったのである。なお、作品冒頭部の読解にかんしては筆者が作成・公刊した『放蕩息子の帰宅』校訂版を参照されたい—— André GIDE, *Le Retour de l'Enfant prodigue*. Éd. critique établie et présentée par Akio YOSHII, Fukuoka: Presses Universitaires du Kyushu, 1992, pp. 63-70.
- 5) Jean TEXCIER, « Barnum et Lucifer », *Populaire Dimanche*, 3^e année - n° 87, 25 juin 1950, p. 6. 上述の切り抜き保存ファイル (Fonds Gide, A-16-V, n° 392) およびジッド研究サイト「ジディアナ」(註1参照)は、この時評の出所を「1945年12月の『フランス・ソワール』紙」と記録しているが、掲載紙・発表時期のいずれも誤りである。
- 6) 参考までにその未刊書簡(個人蔵)を訳出・引用する——「親愛なるジャン・テクシエ/お書きになった時評数点を私に読ませようのご配慮、まことに有り難く存じます。ご親切にもお送りいただいた記事を、さほど抵抗を覚えるような箇所もなく、はじめから終わりまで楽しく拝読しました。気前よくご自身の神々を理想化されるご様子を好ましく思います。こう書くのは、あなたが褒めそやしすぎの〔ジュール〕ヴァレスのことを念頭においてのこと。だが、あなたが賛嘆するその理由こそは見事です。そしてそれこそが大切なのです。〔…〕あなたと少し長くお話ができれば嬉しいのですが、私の体力はひどく落ちており、もう直ぐにもお陀仏になりそうな気がします。そろそろ店じまいの頃合いでしょう。嗚呼！しかし私の親愛の情だけは疑わないでくださいますよう。/アンドレ・ジッド」。
- 7) Jean TEXCIER, « André Gide et sa "constante" », *Populaire Dimanche*, 3^e année - n° 123, 4 mars 1951, p. 5.